

メーヌ・ド・ビランにおける反省の動性と発生について

越後 圭一

Le dynamisme et la genèse de la réflexion chez Maine de Biran

Keiichi ECHIGO

La réflexion chez Maine de Biran a deux aspects : *dynamique* autant qu'elle nous fait se replier au point de vue subjectif dans l'action, et *statique* autant qu'elle est un état de l'« aperception immédiate » de cette action. Or, le premier aspect, qui caractérise la réflexion comme le *passage* vers l'état complètement réflexif de l'« aperception immédiate », n'atteste-t-il pas que sa philosophie réflexive est une doctrine de l'individuation de la réflexion même ? Cet article a pour but de développer un peu schématiquement la genèse de la réflexion biranienne à l'égard de cet intérêt.

D'abord, en distinguant ses deux aspects : *concentration* et *redoublement*, nous montrerons que c'est le seconde aspect qui explique le dynamisme de la réflexion en tant que *passage* vers l'état concentré à la subjectivité. La « réflexion concentrée », le premier aspect de la réflexion, nous fait descendre jusqu'au fond de nous-mêmes, et connaître directement la puissance et les formes essentielles du sujet. Mais, elle ne met pas en raison *comment s'engendre* cet état intime. Ce qui répond à cette question est un caractère du *redoublement*, l'« aperception redoublée » dans l'acte et les effets sensibles de cet acte. Dès lors, nous essayerons de préciser comment ce *redoublement* engendre la « réflexion concentrée » en en excluant des éléments sensitifs étrangers.

Ensuite, nous examinerons la critique du concept lockien de réflexion, pour démontrer que la réflexion biranienne renferme en elle la différence de degré de l'intensité et de la profondeur, depuis la première aperception dans la formation de l'« idée de sensation » jusqu'à la réflexion supérieure dans celle de l'idée d'opération intellectuelle ou la notion. Cet examen permettra de comprendre le passage réflexif à partir de la sensation jusqu'à l'intellection, à mesure que le

redoublement aperceptif exclut des éléments hétérogènes, et que s'approfondit la *concentration* de la pensée.

目次

はじめに

1 章 反省のもつ集中化と二重化の性格

i 節 反省による覚知への集中化

ii 節 反省による覚知の二重化

iii 節 集中化と二重化の関係

iv 節 ロメイエ・デールベイ氏の解釈

2 章 ロックの「反省」概念への批判と、「反省」がもつ程度の差異

i 節 ビランによるロックの「反省」概念批判

ii 節 感官に対して始まりつつある反省

iii 節 反省がもつ二つの局面、「深さ」の程度の差異

結びにかえて

はじめに

一般に反省とは、外的世界に属する対象の観察ではなく、そうした観察を為す主体自身についての内的観察であると言えよう。メーヌ・ド・ビラン(Maine de Biran, 1766-1824)が自らの哲学の方法とした反省もまた、こうした性格をもつものである。しかしながら、ビランの反省は、主体を対象とした一つの観察状態であるよりはむしろ、そうした状態へ向けて為される一つの視点移動として捉えられるべきであるように思われる。つまり、それは対象であれ主体であれ、何かを観察する場合における静的な状態である以上に、主体の内的観察へ向けての動的な視点移動なのであって、こうした動性こそがビランが「反省」の名でもって示そうとした事柄ではなかろうか。本稿の目的は、メーヌ・ド・ビランの反省方法がもつこの動性を明らかにすることにある。だが、そのためにもまず彼の反省がもつ三つの特徴を確認することから始めよう。

ある日の日記のなかで、ビランは「自我とは何であるか」という旧友の問に答えられなかったエピソードを回顧し、こう独白している。

私には答えることが出来なかった。[この問に答えようとするれば]意識の内密な視点に身を置かねばならない。けれども、そのようにして変わらぬままに留まってすべての現象を判断するこの統一体が現前した折には、人はこの自我を覚知し、もはやそれが何であるかとは問わないのである¹。

ここに描出されているのは、まさしくビランが「反省」と呼ぶところの行為に他ならない。だが、反省はここで、単に「自我」を対象とした観察状態であるよりはむしろ、「自我」それ自身の視点、「意識の内密な視点(point de vue intime de la conscience)」への移行として描出されている。この移行が果たされた矢先には、もはや「自我とは何か」の問に答えることが問題とはならない。なぜならば、反省の行為によって意識の内密な領野に「身を置く(se placer)」やいなや、「私」の個的存在(existence individuelle)が確実なものとして直接的に知られるからである。この問に答えられないのは、問に対する適切な解が与えられないからではない。むしろ、反省するやいなや、まさしく最も適切な解が自己自身に与えられる。が、しかし、その直接知を言語記号でもって定式化し、他人に伝達しようとする、必ずこの直接知の真意を損ねてしまう。それがゆえにビランは答えられなかったのではあるまいか。とはいえ、ここで注目したいのは「私」の実存の確実性なのではない。「哲学することは反省することである」と確言するビランにとって²、「哲学」とは何よりもまず、

世界の喧騒のなかであろうが一人部屋の孤独と静寂のなかであろうが、まだ反省が生じていないどんな状況であれ、そこから主体の個的存在の内密な領域へと移行することに他ならないのであって、この移行によってこそ、反省者は自らの「自我」を直接知ることのできる内的領域へと退きこもり、そこで覚知される「自我」の個的存在それ自身へと自らを同一化するに至るのである。

ところが、この移行は、「自我」に属するもの、ないしは自己覚知の諸形式を把握させるものであるとともに、またそうした事柄を表現へもたらず努力でもある。たしかにビランは、反省によって得られる「自我」についての直接知を何らかの表現媒体のもとへ安々と手渡したりはしない。けれども、いくら「自我」とは何かの間に答えられないと白状する日記のなかであっても、彼はたしかに「自我」を「変わらぬままに留まってすべての現象を判断するこの統一体」というように記述している。つまり、「自我」の覚知の経験が含みもつ本質的な形式の一つを、その直接的覚知のただなかで把握し、またそれを言葉でもって表現してもいるのである。これは「自我」とはどういったものであるかの間に対するビランなりの解の表現とは言えまいか。実際、こうした直接的把握の表現化の努力がなければ、「反省」の移行によって得られるいかなる知も反省哲学の成果として後世に書き残されはしなかったであろう。

それゆえ、ビランの反省は少なくとも三つの特徴をもつものだと言える。第一に、意識主体の内密な領域へ移行し「自我」の視点に身を置く移行、第二に、それによって「自我」を直接的に覚知しながらその覚知の諸形式を把握する直接的覚知、そして最後に、そうした直接知を言語的な諸記号を用いて描出する表現の三つである。本稿では、反省のもつ動性を明らかにするために、はじめの二つの特徴に焦点を絞って検討していくことにする。

1 章 反省のもつ集中化と二重化の性格

i 節 反省による覚知への集中化

主体の内密性への移行と主体の諸形式の直接的な覚知という二つの特徴を強調するために、メヌ・ド・ビランは「集中的反省(*réflexion concentrée*)」という名称をしばしば用いる。実際、この集中化という性格づけは、これら二つの特徴を一度に表現するものである

ように思われる。というのも、反省が集中的であるのは、第一に、思考を自己自身へ集中させ、主体のもつ諸観念の形成作用そのもののうちへと下降させるからであり、第二に、それによって主体の経験に固有の諸形式を直接的な仕方では把握させるからである(III:213, 289)。この意味において、反省はまた「内的な反省(réflexion intérieure)」や「内密な反省(réflexion intime)」などとも呼ばれる。

そもそも、この「集中的反省」という名称は、意識の内密性へと移行させない類の反省、すなわち「鏡映的反省(réflexion spéculaire)」と対比し区別するためのものであることを忘れてはなるまい。反省には、少なくとも、ピラン自身が実行するものと、彼が拒否するものとがあって、前者が集中的なものであるのに対し、後者は鏡映的、鏡像的、表象的なものである。彼によれば、「鏡映的反省」とは「自己自身に集中することなしに、ある対象から別の対象へと、いわば跳ね返る」(III:192)タイプの反省である。これによって人は「自らの知性を鏡のなかでのように観想し、思考のすべてをイメージのなかで把握する」(III:349)ようになる。そこでは人はあたかも鏡に映った自分の姿しか見ないかのようなのである。その結果、この反省は「主体を自己自身の外へ浮き彫りにするので、自分がいないところに自分を見ていると信じ、自分がいるところにもはや自分を覚知することも見付け出すこともできない」(III:192)といった状態をつくりだす。そこでは、あたかも「合わせ鏡(jeu de miroirs)」のなかでのように、人間のもつ表象可能な側面、対象化可能なイメージ(つまり身体的表象)ばかりが増幅されることであろう。ところが、果てしなく反復されうこうした増殖をいくら重ねたところで、それが主体の内密な領域へと思考を移行させることは一向にない。それゆえ「鏡映的反省」は思考を内的に成り立たしめる諸形式を直接的な仕方では把握させることが決してないのである(VII:206)。これに対し、「集中的反省」はまったく正反対の効果を生み出す。それは、鏡面のような何らかの媒体のうえで主体の表象可能な側面のみを浮き彫りにするのではなく、逆にいかなる代理表象をも差し挟むことなしに、主体の意識そのものの内へと思考を直接的に下降させていく。これによって「思惟主体の内奥そのもののうちに集中し、その主体が、その最も内密な諸様態や、その固有の基底から生まれる諸行為の内でもつような諸々の関係を洞察する」ことが可能となるのである(III:25)。ピランは、「鏡映的反省」によって遂行される「客観的観念学」に対し、「集中的反省」によってのみ可能となる主体性の内的な探求を「主観的観念学(idéologie subjective)」(Ibid.)と命名する。哲学することを反省することと同一視する彼にとって、「集中的反省」によるこの「主観的観念学」こそが哲学の名に最も相応しいのである。

ii 節 反省による覚知の二重化

このように、反省のもつ集中化の側面は、それがいかにして為されるのかはさておき、主体性それ自身の内部への下降ないしは移行と、それによる主体の内的諸形式の直接的な覚知という二つの特徴を併せもっていると言えよう。しかしながら、集中化という側面に注目するだけでは、反省のもつ移行の特徴の内実が完全に解明されたことにはならない。「集中的反省」という名はメーヌ・ド・ビランの反省がいかなるものかを言い当ててはいるが、それがいかにして成立しうるのかという点まで考慮に入れていないからである。意識の内密な領域への移行は、そのプロセスのなかで「鏡映的反省」とは異なる「集中的反省」の状態を発生させる。だが、集中化それ自身のうちにこの移行を果たさせる条件が登記されているとは言い難い。ビランの反省を完足的に理解するためには、それが「集中的反省」である点のみならず、他ならぬこの「集中的反省」がいかなる条件のもとで生じうるのかという点まで理解する必要がある。

このことは、ビランの反省が、行為とそれが生み出す可感的結果とにおいて「二重化される覚知(*aperception redoublée*)」(III:154)であると定義される点に関係している。つまり、反省は、単に集中化の側面だけでなく二重化(*redoublement*)の側面をも併せもつ。ベーコンに言及しつつ、反省が生じる条件と反省されるものについてビランはこう述べている。

力であるこの自我が自由な能動性によって為し遂げることのうち、自我に従属する有機体の諸部分に対して展開されることはすべて、意識によって排他的に知覚され、そこで二重化される、すなわち反省されるのである(*s'y redouble ou s'y réfléchit*)(IX:50)。

ここで彼が「自我」を「力である」とも表現している点については今はおいておこう。彼は、ここで能動的行為の結果の「知覚(*perception*)」を指し示すものとして、ベーコンの用いる「印象の二重化(*conduplicatio impressionis*)」という表現を引き合いに出している。この「二重化」は、ビランの意図を汲むかぎり、複数のイマージュ間の合わせ鏡的な関係を指していると解されてはならない。そうではなく、行為が生み出す可感的結果の知覚を通して得られる間接的な覚知と、その行為それ自身に伴う行為する力の直接的な覚知との間の、覚知の相乗効果を指すものと解されるべきである。この理解は、「二重化される覚知」が「集中的反省」の状態を発生させるそのプロセスを究明することによって正当化されうるように思われる。

行為が生み出す可感的結果の知覚とその行為それ自身の直接的覚知との間の二重化の関係は、行為とそれが生み出す結果との間の生産関係でもある。しかし、行為の生産関係はいかにして一つの集中的な反省の存立を可能ならしめるのだろうか。それは、覚知の二重化によって生じる行為様態の排他性による。行為が身体に直接的な仕方与える可感的な

結果は、それに属さない身体上の感性的な諸要素から分離され「排他的に知覚され」る (*Ibid.*)。例えば、発話行為は、それが生み出す自分の声の知覚とともに二重化する一方で、その音声とは区別される別種の身体的諸印象（自分の声として覚知されない諸々の雑音の知覚）から覚知それ自身を切り離す。こうして「集中的反省」が成立するわけである。というのも、この排他性こそが、意識の内密な領域を他なる要素から純化し、反省者がその領域へ完全に移行するための環境を整えるからである。

ここから二つの点が導き出される。第一に、発話に代表される行為の关系的様態は反省が存立するための「支点(*point d'appui*)」の役割を果たすということ。第二に、行為がそれに対して諸結果を生み付けるところの有機的身体は、その行為とともに一つの「場所(*lieu*)」を形成し、その場所において行為の諸結果が排他的に知覚される、すなわち反省が生じるということである。第一点目を理解するには、ビランによるデカルト批判を想起するのがよい。ビランは、表象主義的な「鏡映的反省」からではなく「集中的反省」から出発したとしてデカルトを高く評価する。だが、その反省の起源からの発生を看過した点については、厳しく非難する。ここからも、ビランの関心が集中的反省のみならずそれへの生成にあり、反省の発生にあることが見て取れよう。彼は、この発生の究明を怠ったデカルトの過ちを、反省的思考を行為の様態へと結び付けなかったことに帰し、こう述べている。

反省から始めながらも、デカルトは次のことをおそらく十分に考察しなかった。すなわち、自らの存在を確認し、そこから絶対的实在[思惟するモノ(*res cogitans*)]を結論するために自らに対してこのように折り返すこの自我が、まさにそうすることで一つの行動(*action*)を起こし、一つの努力(*effort*)を為しているのだということを。ところが、あらゆる行動は本質的に、また実際にも、一つの主体と一つの項とを前提しはしないだろうか。抵抗もなしに努力を絶対的なものと見なすことがはたしてできようか。自分の身体が存在よりも自分の魂のそのほうがより確かなものであると信じたとき、まちがいなくこの瞑想の天才は錯覚に陥ったのである。というのも、身体はこの共-存在(*co-existence*)の内的連続的感知（客観的観念やイメージとは言うまい）をもつことなしには、彼は思考することも彼であることもできなかつたはずだからである(III:364)。

それゆえ、ビランにおいては、行為に対する抵抗であるところの身体が「自我」と共に存在するということが、またそうした仕方でも「自我」と身体とが共に内的直接的に覚知されるということが、反省的思考の存立する不可欠の条件となっている。ところで、行為する「自我」と行為に対する抵抗とがともに感知されるような様態こそが、まさしく彼の言う意志的行為の様態、「努力」の様態であるに他ならない。反省的移行はこの様態に始まる。

そして、そこで行為のみが排他的に知覚されるに至って、ついに集中化が完足的なものとなる。メヌ・ド・ビランにおける反省とは、こうした集中化へ向けての一連のプロセスであると言える。

意志的行為の様態はこのプロセスを開始させ、それが持続的に発展するための支えとなる。彼は習慣の影響についての論考の時点ですでにこの点を強調していた³。「自我」がそこにおいて身体を抵抗項としながら、自らを直接的に覚知するような行為の关系的様態こそ、深化していく反省的分析にとっての「支点」となるのである⁴。だが、すでに完足的な集中化を果たした反省状態からすれば、その状態を維持し続けているはずの「支点」、つまり思考と身体の分離不可能な関係性が見落とされても無理はない。まさにデカルトにおいてそうであったように、集中化の果てでは、反省の集中化プロセスは事後的なものに過ぎず、行為が条件とするところの身体抵抗とそこに生産される可感的諸結果のすべてが二次的なものとして捨象されてしまいかねない。ところが、ビランによれば、行為とそれに抵抗する身体との関係こそが、反省されるすべての知にとって唯一の「場所」なのであって、これが行為知覚のもつ排他性から帰結する第二の点なのである。実際、ベーコンに言及する先の引用でビランは「自我に従属する有機体の諸部分」に展開されるものはまさしくそこで二重化され反省されるのだと述べている。この「そこ」は行為のただなかでその行為を決定する「自我」とペアになる身体部分への関係、つまり行為と身体不可分な関係を指している。そこにおいて私の行為がもたらす可感的要素のみが排他的に知覚され、「自我」が決定する「私の行為」それ自身が二重化され反省されるに至るのである。

もっとも、身体それ自身は反省のみに帰属する場所なのではない。リニャック神父への注釈のなかでビランはこう述べている。

身体はいかなる能動性もそれ自身によっては与えられず、すなわち、いかなるもの原因でもなく、それは単にそこにおいて我々が何らかの可感的諸変様を知覚する座ないしは場所(*lieu*)なのであって、それら変様は我々の固有の力にならって想念される原因ないしは能動力によって決定されるのである(XI-2:69)。

それゆえ、身体は、反省を排他的に存立させるのに貢献する知覚のみならず、知覚される諸変様一般がそこに展開されるような、広い意味での「場所」であると言える。これら諸変様のなかには、我々によって意志的に生産されるものもあれば、そうでないものもある。いずれの諸変様もそこで感覚され知覚されはするが、しかしそこで反省を存立させる二重化の運動の可能性を決定するのは身体ではない。そうではなく、思考と身体とを不可分な仕方結び合わせる行為努力の様態こそがこの二重化を可能にするのである⁵。「集中的反省」が完足的になってしまった状態から見れば、この関係性は看過されがちとなる。というのも、「集中的反省」は行為の抵抗項である身体の側ではなく、行為とその決定因であ

る意志の側にのみ集中してしまった状態、言い換えれば行為の排他的知覚へと行き着いた状態であり、ピランにしたがえば、デカルトのような反省者はそこでその反省行為そのものを可能にし維持し続けている「支点」であるところの思考と身体の関係にまではほとんど注意を向けないからである。

iii 節 集中化と二重化の関係

重要なのは、第一に「集中的反省」は行為の排他的な知覚のなかでしか現象しないということ、第二に「集中的反省」それ自身はこの排他的知覚における知覚の二重化とは区別されねばならないということである。

第一に、先ほど見たように、「集中的反省」は意志的行為の様態においてしか存立しない。それは行為の様態の「質料」となる行為の可感的結果における間接的知覚と、その「形相」となる行為それ自身の直接的知覚とが、排他的な仕方でもなり合い、他の感性的諸印象のすべてをこの二重化された知覚の囲いの外へ追いやる場合にしか現れない。実際、「集中的反省」は意志的行為の可感的結果の知覚が有する排他性を条件としてのみ成立する。というのも、「集中的反省」とは、意識の内密性に属さない感性的要素を排除し、意識の内密な領域のうちで行為の知覚へと純粋な仕方でも集中ないしは下降する反省だからである。また、この異質な感性的諸要素の排除を可能にするものこそが、とりもなさず行為の知覚がもつ排他性に他ならないからである。反省が意志的行為の様態の二重化のなかで生じる仕方について、ピランはこう述べている。

能動的な諸様態、すなわち意志に本質的に依存する諸様態だけが、いわゆる二重化の性格をもつのだが、この性格が行為の原理をこの行為それ自身のうへに折り返させ(fait replier)、こうしてこれら個別的な諸様態のなかに人格的知覚を構成するのである(III:108)。

してみれば、意志的行為によってしか、行為とその結果との間に知覚の二重化が排他的な仕方でも生じることはないのだが、まさしくこの排他的な様態こそが、その内に行為に対する行為の原理、すなわち「努力」の折り返しを生み出し、行為とその原理との関係それ自身、すなわち主体的経験の形式(形相)、一言で言えば「人格」に属するものが、純粋な仕方でも知覚されるのである。この内密な折り返しの状態こそが、とりもなおさず、反省哲

学固有のフィールドであるところの「集中的反省」と呼ばれているものの内実であるにちがいないのだが、他方でその状態を生むもの（replier させるもの(fait replier)）こそが能動的な行為諸様態であるとも言えよう。

それゆえ、第二に、この折り返しの側面を、それを内的に存立させるところの生産的二重化の側面から区別して特徴づける必要がある。折り返しとは、行為とその原理である力とが、意識の内密な領域の内部で、「自我」に属するもの、またその「自我」それ自身として直接的に覚知される事態を指す。私はそこで「私とは何であるか」の解を得る。主体の内密性へのこの直接的な折り返しとは、他ならぬ、意志的行為の観念がそういうものとして一個の行為主体によって獲得される（と同時にこの行為主体が自己を把握する）状況そのものであると言えよう。ピランは、「主観的観念学」であるところの反省哲学の見地から、こうした状況から外れる場合について次のように述べている。

思考主体の諸行為ないしは諸状態の反省的な学においては[…中略…]、これら諸行為のうちいずれかのものは、その原理ないしは実在的な生産原因の認識ないしは内密な感情の外では、その生産のなかで想念され直接的に覚知されることはないであろう(IV:25)。

逆に言えば、折り返しとは、意志的行為の生産のなかで（すなわち行為の生産的二重化における覚知の重なり合いの輪のなかで）、行為の観念をその原因である「自我」の感情に直接的かつ分離不可能な仕方で結び付けつつ、この観念をもつものとしての「自我」を覚知することに他ならないのである。

行為の折り返しが覚知の二重化から区別されねばならない理由は、それが、二重化された覚知のなかに留まりながらも、行為の様態を形づくる形相、すなわち行為それ自身とその原理である力能との直接的な関係の側へと集中した仕方で生じるからであり、要するに行為の折り返しは「自我」の直接的覚知そのものだからである。反省においては、「実際、鍛え、変形し、生産する諸能力は、鍛えられるか変形されるかする諸々の素材(matériaux)からは区別されるのであって、その部分を成すわけではまったくない。思惟存在の諸操作の学は、それゆえ、その諸対象の学と混同されてはならないのである…」(III:55)。行為に対する行為の原理の折り返しは、意志的行為の反省様態を形づくる直接的覚知と間接的覚知との二重化関係のうち、形相となる側、すなわち、素材を対象にもつ生産行為それ自身とその決定因である「自我」との間の直接的な覚知関係にのみ集中し、思惟の素材となる行為の可感的諸結果へは集中しない。この意味で、「折り返し」という特徴は、ピランの反省がいかなるものかを、つまりそれが「集中的反省」であることを規定するとともに、その集中がどこへの集中かを明示していると言えよう。他方、行為の様態における覚知の二重化関係はといえば、件の折り返しがいかにして生じるかを規定している。それゆえ、

「折り返し」と「二重化」という二特徴は、後者が前者を内包し、その存立を条件づけるものであるかぎり、反省の成立において不可分な関係にあるが同一視されてはならないように思われる。ピランの反省がもつ動性は、これら二つの側面の、区別されるが不可分な係わり合いによって特徴づけられるのではなからうか。

iv 節 ロメイエ・デールベイ氏の解釈

メヌ・ド・ピランが行為とその結果における「二重化された覚知」を反省と定義するとき、彼は反省が「集中的反省」へ向けての一つの移行であることを強調し、反省をその発生過程、個体化のプロセスにしたがって規定しようとしているように思われる。この意味で、なるほど二重化の側面は「集中的反省」のそれと不可分な関係にあり、反省のもつ一つの本質的な側面であると言ってもまちがいなからう。ところが、「集中的反省」の側面のみが強調されるとき、この生産的²二重化の側面が、したがって結果的には移行としての反省の動性が、見落されてしまわないだろうか。

ロメイエ・デールベイ氏の解釈がその一例として挙げられよう。ミシェル・アンリの解釈にしたがう彼によれば、ピランの反省は、「自我」の表象を外部に立てたうえでそれへ向けて為される一つの「二重化(redoublement)」、あるいはむしろ「二分割(dédoublement)」の運動なのではない。逆に、反省は「自我」のただなかに距離をおくことの全面的な拒否なのである。氏は正当にもこう述べる。「ピラン的反省においては、意識は二重化では決してない。なぜなら、反省は隔たりの隙間を作ることではないし、何らの分裂増殖をも喚起しないからである」⁶。まさしく、ピランの反省は自己の表象へと折り重なるという意味での鏡像的な「二重化」の運動なのではない。そうではなく「自我」の表象を前提することなしに「自我」に直接的に復帰する回帰運動なのである。デールベイ氏はこう述べる。

「「反省」においては、[二重化(redoublement)の]接頭辞《re》は、隔たりの隙間を作るのではなく回帰運動を指しているのもあって、しかもそれは自己に対する回帰[自己の上への回帰](retour sur soi)ではなく、自己に属する回帰(retour à soi)なのである」⁷。それゆえ、氏によれば、「反省」の語意としては「二重化」よりも「退却(replier)」のほうがむしろ適切である。氏はこの語を二重化を連想させる「折り返し」よりもむしろ、一般に部隊が「退却する(se replier)」と言われる場合に想定される意味、すなわち自己の外への展開を止めさせ、自陣へ後退させるという意味で解するよう提案している。こうした自己への「退却」においては、現象学的な意味での志向性によって狙われるものの認識ではなく、あらゆる

志向性に含まれるものの認識こそが問題となるのであって、反省は観察行為に対して外的な地点から「自我」の表象に対して展開される「内観(introspection)」なのでは決してなく、むしろ観察行為それ自身が「自我」に復帰し、帰属するような直接的な「自己への現存(*présence à soi*)」⁸を意味するのである。

デールベイ氏によるこうした指摘は、反省のもつ「集中化」の側面にかぎってはたしかに正しい。しかしながら、この側面のみを強調するあまりに、「二重化」を表象するものと表象されるものとの間の「二分割」としか見ない氏は、メヌ・ド・ビランの反省のもつ「二重化」の発生的性格を見逃すどころか否定すらしてしまう。「最後に」と、氏は述べる、「ビランがときどき自分ではっきりと認めている意味と対立する意味において語を用い、ペーコンとともに二重化(*conduplicatio*)について語っている点を指摘しておこう。この意味はビラン的ではないのである」⁹。たしかに、「二重化」を「自我」を表象するイメージの上に(*sur*)すでに出来上がった「自我」を事後的に重ね合わせるという意味での「イメージの反復」¹⁰と捉えるならば、これは表象主義を拒絶するビランにとっての反省では決してありえないであろう。しかし、だからといって、ビランの反省があらゆる二重化運動の否定だと決め付けてしまうのは早計ではなからうか。すでに見たように、反省のうちに、表象の反復ではない別の仕方での反復、すなわち行為における覚知の二重化を彼が認めていることもまた事実だからである。意志的決定による生産行為によって、一方では身体に対して行為が生み出す結果において、他方ではその行為それ自身において、「二重化された覚知」が成立する。そのかぎりでは「自己への現存」への移行は成立しない。行為の原理への「折り返し」、ないしは「退却」としての「集中的反省」の側面は、それを自らのうちに胚胎させる非表象的な生産的・二重化の側面と不可分な関係にあり、またそこから区別されうる¹¹。

覚知の反復ないし「二重化」とそれによる直接的覚知の「集中化」という二つの側面を反省のうちに認めることは、反省を単に主体の内密性に内在的な観察状態と見なすだけでなく、その内密性への移行として動的に捉えることに繋がるように思われる。そして、このような読解が可能であるとするならば、それはビランが主体の内面性のみならず、その直接的把握へ向けて反省する能力それじたいの発生・個体化ということに常に関心を寄せていたからではなからうか。

2 章 ロックの「反省」概念への批判と、「反省」がもつ程度の差異

反省が二つの側面をもつこと、すなわち、行為とその結果とにおける覚知の「二重化」とそれによる行為主体の内密な領域への「集中化」という二つの側面でもって反省が特徴づけられうるということは、それが一つのプロセスであるということを示しているとも言えよう。メーヌ・ド・ビランにおける反省には、第一に、前反省的状态から反省的状态へと移行しつつ反省者が自己自身を覚知し始めるような局面がある。第二に、この移行によって顕在化してくる自己覚知の地平上において、反省者が自らに属する諸行為および諸形式を純粹に、はっきりと把握していくような局面がある。ビランにおける反省は、第一の局面である反省的移行から第二の局面である反省による行為的覚知へと進展していくプロセスであり、また彼の反省じたいがそれを通して明瞭な仕方では个体化してくるような一つのプロセスであるように思われる。まさしくこのプロセスを通して、「集中的反省」が、したがってまた表象に依存しないビラン固有の反省哲学が、表象的反省から自らを切り離しつつ（それゆえそれを批判しながら）、一個の現実として形を成すに至るからである。

そこで本章では、この反省の个体化をより精確に理解するために、反省的経験の哲学的価値を認めたロックに対するビランの批判を検討することにしよう。

i 節 ビランによるロックの「反省」概念批判

メーヌ・ド・ビランは、自らの反省哲学である「主観的観念学」を確立するにあたり、ロックの体系への批判に重要な役割を演じさせている。実際、『思考の分解論』から『心理学の諸基礎』に至るまで、ロック批判が彼のテキストのなかで重要な位置を占めていることがわかる¹²。それは主に、コンディヤックや観念学派の感覚主義的一元論に対し、その由来から根源的な批判を加えるための手続きなのであるが、さらに重要であると思われるのは、ビランが主体性を研究するための反省の方法に一つの形を与えることに成功しえたのが他ならぬロックへの批判を通してであった、という点であろう。

ビランによるロックの評価は両面的なものである。彼は、思考の諸作用の単純観念を獲得させる方法として「反省(Réflexion)」を認めた点、またそうした観念が対象によって惹き起こされる変様としての「感覚(Sensation)」ではなく、主体に固有の「反省」にしか関連づけられえないと認めた点について、ロックを高く評価する。ところが他方、ロックが「感覚」と「反省」の区別を曖昧にした点についてはビランは否定的である。ロックにおいては、「反省」が獲得させる知的諸操作の観念は、それら諸操作に対して外的な対象に起因するところの「感覚の観念」からは原理的に、すなわちそれらが派生してくる源泉の

レベルで分離される。したがって、二種の観念には異なる二つの源泉があると推断されるのである¹³。ところが、ビランの考えでは、諸操作の反省的観念と感覚の観念とが区別されるのは、観念に異なる二源泉があるからでは決してない。というのも、彼にとって、感覚の観念の素材となるのは外的で受動的な印象であるにしても、その観念の起源は諸操作の反省的観念のそれと同じく意志的行為だからである。獲得される二種の観念の内容が異なるからといって、観念そのものの存在に対して二つの源泉を想定するのは、ビランとしてはやり過ぎなのである。

二種の観念に異なる二源泉があると推断してしまったことによって、ロックの「反省」概念の規定は必然的にその本性を逸してしまうことになった、とビランは考える。そして、このことは観念および主体の発生という問題をロックが捉え損なっていたことと無関係ではない。ロックが「反省」と「感覚」を観念の二源泉として完全に分離してしまうとき、彼はすでに構成された既存の主体によるすでに出来上がった観念の一方的な受容のみを想定しているのである。ビランはこう述べている。

可感的諸観念が完全に出来上がった状態で外部から知性のうちへ到来すると最初に認めることによって、この哲学者[ロック]はこの源泉からあらゆる反省的機能を排除し、それを新たな練り上げの所産、すなわち思考主体の諸操作に固有の帰結であるような高次の諸観念のためにとっておかねばならなかった(III:61)。

反省機能を高次の知的諸操作の観念（同一性、実体などの概念）の獲得のみに限定することで、ロックは反省の規定の内に一つの両義性を持ち込んでしまうことになる。というのも、反省的観念の起源それ自身が、観念そのものの起源ではなしに、反省の事後的な高次の行使のうちに設定されてしまうからである。

そもそも、ある観念が反省から由来し、そのあとで事後的に反省によって、ないしはその内で練り上げられるなどと言いうるであろうか。ロックは我々の諸観念の近い源泉を、それら諸観念に新たな形を与えはするがそのいずれも源泉とは言われえないような遠い諸操作から、十分な仕方で区別しないのである(III:63)。

ここでは、反省を、操作の観念の受動的な受容であると同時に観念を加工する能動的な操作であると定義するロックの矛盾した思考態度が批判されている。すでに発生した観念をさらに加工する類の高次の知的諸操作は、観念そのものの源泉とは見なせない。それにもかかわらず、これら諸操作を「感覚の観念」とは別の起源をもつものと見なし、それらの反省的諸観念の源泉そのものであると定義づけるならば、反省能力を可感的経験の内に起

源をもたないものと見なさざるをえなくなる。したがって、自己自身の存在を知る能力を生得的に隠し持つような一つの主体、すなわち「自己自身に対して生得的な主体(sujet inné à lui-même)」を想定せざるをえなくなる(III:61)。実際、ロックは、知性が「自己自身に対して折り返す(se replier [...] sur soi-même)」、すなわち「自分自身の諸操作について反省する(réfléchir sur ses propres opérations)」¹⁴ことができると認めるかたわらで、そのように反省する精神それ自身をその開始点においてタブラ・ラサであると想定する。観念の発生ではなしに、既成の観念の受動的受容から出発するがゆえに、ロックは反省の能力やそれをもつ主体自身を想定するかたわら、それらがいかにして発生するのかと問わずに済みます。そこで「反省」は起源も発生ももたない「可能態の反省(réflexion en puissance)」(III:61)として暗黙裡に前提されざるをえなくなるであろう。これはとりもなおさず、あらゆる生得原理の拒絶を説くロックの教説それ自身に対する裏切りの所作であるに他ならない。ロックと同じく生得原理を拒絶したいビランにしてみれば、ロックが「反省」概念にもたらした制限(高次の知的諸操作の観念獲得への反省機能の制限)と両義性(反省を能動かつ受動と規定する矛盾した態度)は、経験論そのものを裏切る思考態度の産物であると言えよう¹⁵。

ii 節 感官に対して始まりつつある反省

メーヌ・ド・ビランによると、ロックの「反省」概念における制限と両義性は二重の過ちから成っている。第一に、「感覚の観念」を既成観念の一方的受容という認識モデルで捉えてしまった過ち。第二に、観念に変形を加える高次の知的諸操作を反省的観念の源泉と見なしてしまった過ちである¹⁶。この二重の過ちのせいで、ロックの経験論はそもそも観念というものがいかにして形成されるのか、また観念をもつ主体がいかにして存立するのか、といった観念と主体の発生の間を立てることが出来なくなった。ところが、ビランの関心はまさしくこうした間にこそ存するように思われる。

観念の発生は、それを獲得する主体の発生、および反省能力の個体化と無関係ではない。というのも、ビランの着想にしたがえば、ある観念が主体によって獲得されるという事態と、一つの主体が何らかの観念をもちつつ立ち上がるという事態とは、厳密に同時的だからであり、また観念と主体の同時的な発生は、とりもなおさず反省(「集中的反省」への移行)が始まりつつある様態においてのみ生じうることだからである。

「感覚の観念」の形成には、能動性ないしは意志的行為の様態、すなわち「意志される努力」の様態がすでに関与している。「感覚の観念」がそれとして認められるとき、そこでは常に「努力」の独自の様態が生成し、この観念の質料となる感性的要素から、意志が提供する固有の質料が排他的に分離されつつ知覚される（例えば、自らの発する声を他の音から分離して、排他的に聴取し始める）。まさにここでこそ、この観念をそれと認める主体が自らの存在を覚知し始めるのである。ピランは、「感覚の観念」の形成段階からすでに関与するこの「努力」の様態を、「感官に対して始まりつつある反省(*réflexion commençant aux sens*)」(III:60)と呼ぶ。この様態は思考主体が自らの存在を覚知し始めるような移行のただなかにある局面であり、「集中的反省」へと進展するプロセスの開始段階に他ならない。そこでは、すでにして観念と主体との同時的発生が始まりつつあるのである。以下に引用する一節のなかで、ピランがロックの配分に対して別のそれを対置させるとき、彼はまさしく経験論からこうした反省の移行の局面を救い出そうとしているように思われるのである。

もしロックが二つの起源を全体的に分離してしまわずに諸感官の行使の帰結そのもののうちでそれらが相互に協働するのを認めていたならば、もし彼が一般に感覚と呼ばれるもの、また彼が感覚の観念と名づけるもののうち、主体においてすでに反省されるしかありえない部分を、自らが触発する起源に関連づけられるような他の部分から区別していたならば、すなわち、それら二つの起源の原初的で道具的な諸条件のうち、自ら反省する、あるいは言うなれば自らを二重化する諸様態を直接的に感じられる諸様態から区別していたならば、諸感官に対して始まりつつある反省はもはや疑問視されることも、感覚と見紛われることもありえなかったはずだ。この反省こそが、諸々の場合において感覚を構成する要素を形成するのである(III:60-61)。

「感官に対して始まりつつある反省」は、高次の知的諸操作の観念とその思考の形式を取り出す「集中的反省」に先立ち、そこへと向かう途上にある反省の萌芽的局面であると言える。それは、前反省的な状態から反省状態へと移行する段階において反省プロセスがとる最初の様態である。この局面は、我々が前章で見たところの行為の生産的二重化、すなわち「意志される努力」である行為のただなかにおける覚知の「二重化」の様態と一致する。高次の思考の直接的な把握である「集中的反省」は、「感覚の観念」においてすでに始まりつつあるこの「二重化」の様態をその始時点にもつ。それゆえ、「集中的反省」は可感的経験のうちに起源をもたないような生得的な能力、「可能態の反省」といった類のものでは決してない。反省は生得的にあるのではなく、それ自身生起する。

もっとも、ビランは、ロックが「感官に対して始まりつつある反省」を認めていないという口実で非難しているのではない。それどころか彼は、ロックこそが反省のこの局面の密かな発見者だとさえ見なしている。たしかにロックは、「感覚の観念」はすべて、出来上がったうえで主体に到来するものだと思い込んでいた。だが、それにもかかわらず、そこでロックが「受け取られる印象に不可分かつ恒常的な仕方で結びついたものとして感じる存在者の覚知」(III:64)を認めていたのも事実である。ビランはまさしくこの可感的な覚知に注目する。

観念という語が準拠するこの覚知は、反省がその起源においてそうであるはずのものとして捉えられたところの反省そのものでなかったとしたら、いったい何であろうか(III:64)。

「感官に対して始まりつつある反省」の局面とは、したがって、受動的に印象を感じ取るなかで生じる主体自身の覚知に他ならないのである。感じ取られる印象が「感覚の観念」の質料となるのだが、この観念がそれとして形成されるとき、そこではそれとは別の質料、すなわち意志が提供する固有の質料、すなわち意志的行為ないしは運動もまた知覚される。前者の質料が分離されつつ後者のそれが排他的に知覚されるとき、この知覚の排他性において努力の様態の二重化が成立し、人格的主体の覚知が生じ始めるのである。したがって、たしかに思考能力の分析は「感覚の観念」を出発点にとるべきだが、受動的に感じられる印象ではなく、能動的な行為努力の二重化から始められねばならない。ロックが非難されるとすれば、それは彼が「感官に対して始まりつつある反省」であるところの感性的覚知を認めなかったからではなく、むしろそれを発見していたにもかかわらず、表象的な思考モデルに引きずられるがままに、この覚知を受動的な質料的印象と誤認し、両者を「感覚」の名のもとで混同してしまったからなのである。

他方、高次の知的諸能力の能動的な行使において働くような「集中的反省」は、その起源を可感的様態に始まりつつある覚知の二重化の内にもっている。それゆえ、高次の思考諸作用の反省的な観念の源泉を、これら高次の諸作用それ自身のうちに想定することは誤りなのである。なぜなら、思考作用の「集中的反省」は、感官の可感的諸結果に表出しない思考の内密性を証しはしても、その反省それ自身が反省的観念そのものの実在的な源泉から由来するのだということを、反省の個体化プロセスに即した仕方で把握させてくれないからである。

もっとも、「感覚の観念」そのものは、「集中的反省」によって獲得される高次の知的諸操作の観念から区別されねばならない。「感覚の観念」においては、意志が直接的に提供しえない感性的要素が分離不可能な質料として含まれており、「自我」が可感的要素から完全に自らを純化しつつ、自らに属する行為ないしは思考の観念だけを純粋な仕方でも

つわけではない。つまり、集中化のみが純化されるわけではないのである。この意味で、「感覚の観念」においては、行為の反省的観念の場合とはちがひ、反省がなお感官に依存する仕方ではか存立しないと言えよう。だが、以上のことはすでに出来上がった観念、すでに個体化した観念の秩序を見るかぎり言えることであるに過ぎない。「感覚の観念」の発生に関して言えば、それはすでにして一つの反省プロセスの開始しつつある状況であることに変わりはないだろう。なぜならば、この観念は、非意志的な感性的質料の他にも、意志が提供する固有の質料（行為の可感的な諸結果）を「主体においてすでに反省されるしかありえない」部分において、すなわち、我々が前章で触れたところの行為と身体不可分な関係においてもつからである。まさしく身体に対する行為のこの関係においてこそ、主体および主体に属するものだけが他の要素から自らを分離し、排他的かつ集中的に反省するに至る。「感覚の観念」はこうした純化へ向けての移行の開始点にあたるものであり、すでにして「反省の部分的な所産そのもの」(III:65)なのである¹⁷。

まとめよう。メーヌ・ド・ビランがロックにおける「反省」概念の不充分さを批判するとき、そこには観念と主体の発生、別言すれば反省の生成というビラン哲学の根本関心を認めることができる。既成の観念の受容という認識モデルに引きずられたがゆえに、ロックの分析は行為ないしは思考の観念を得させる「反省」それ自身の開始状況を捉えそこなつた。それゆえ、「反省」それ自身の生成のただなかでしか把握されえないような観念と主体の発生を、ロックは直接的な仕方では捉えることができなかつた——以上がビランによるロックの「反省」概念批判の要点であるように思われる¹⁸。分析のこの不徹底のせいで、ロックは、観念が派生する局面ですでに働き始めているはずの反省を看過し、すでに出来上がった観念に対して事後的に加工を施すことでしかないような知的諸操作の把握のみに、反省のすべての局面を限定してしまつた。それゆえ、ビランは、知的諸操作の反省的観念を得るロックの主体を、さらにその観念と主体自身の生成を実際に把握するところまで「掘り下げる(*approfondir*)」必要があると主張する。知的諸行為についての高次の反省が可能であるということは、そこですでに主体の内密性へ身を置きなおすような集中化が生じているはずなのだが、そうした集中化へと至るプロセスそのものを、反省それ自身の起源から、その個体化に即した仕方では知るためには、「感官に対して始まりつつある反省」の局面にまで反省的分析のレベルを深める必要があるのである¹⁹。

iii 節 反省がもつ二つの局面、「深さ」の程度の差異

さて、こうした「掘り下げ」が為されるためには、行為の「集中的反省」だけでなく生理学の知見にも拠らねばならないとメヌ・ド・ビランは考えるのだが、この検討については別の機会に譲るとして、ここでは反省のもつ二つの局面がともに「努力」を条件とするかぎりにおいて強度の差異として切り結んでいるという点を指摘し、稿を閉じることにしたい。

反省の高次の局面を「掘りさげる」ことによってその源泉ないしは開始の局面にまで遡行しうるということは、換言すれば、低次の局面から高次のそれへと進展していく「深さ」の差異を反省が含みもっている、ということの意味する。『思考の分解論』訂正版のなかで、「感覚の観念」に伴う感性的覚知に言及しつつ、彼はこう述べている。

この第一の覚知は、続いて彼[ロック]が反省と呼ぶであろうところのものから、いかなる点で異なりうるであろうか、深さの程度、あるいはすべての領分が由来してくる共通の起源からの遠さの大小によるのでなければ(III:355)。

感性的覚知と高次の反省のどちらの局面においても、主体が自らを覚知することにかわりはない。というのも、「感覚の観念」の生成段階においてすでに反省が始まりつつあるのは、そこにおいて高次の知的諸能力を行使する際に生じる覚知と同じ覚知が生じ始めるからである。ここにビランが「意識(conscience)」という語で理解する主観的な状態を認めることができる。知的諸行為の高次の反省は、行為が明瞭な仕方で遂行される場合に生じる「集中的反省」に他ならないが、そこにおいては行為の知覚の排他性がより完全な仕方で実現され、行為の原理に対する行為それ自身の折り返しが、より純粋な、より判明な仕方で生じる。意識主体は、行為の原因力として純粋に覚知されるのである。ところが、この折り返しは「感覚の観念」において、すでに感性的な主体の覚知という仕方で始まりつつある。ただし、この場合では、行為の排他的知覚を生み出す「努力」の強度が小さいため、知覚の排他性が完全とはならない。それゆえ、主体の覚知にとって異質な感性的要素が、反省が个体化する場所であるところの思考と身体の関係の輪から完全に排除されることがない。したがってまた、主体の覚知から完全に分離されることがない（だからこそ、ここに行為の反省的観念ではなしに、感覚的観念が形成されうるのである）。

こういうわけで、「感官に対して始まりつつある反省」と行為様態の「集中的反省」は、第一に、「深さ」の程度差において結び合わされるのだが、これは両者がともに「努力」の様態を内在させていること（「内在努力(effort immanent)」(III:141)）、それらの区別が努力の強度の差異において生じるということの意味している。が、このことは、第二に、これら二つの局面が一種の遠近法にしがたっていること、つまり観念と主体の起源からの遠近の差異によって区別されうることを意味する。すでに述べたように、ロックはこの起源からの距離の差異を適切に区別しなかった。すなわち、反省が観念と主体の最初の発生

段階から働き、またその同じ反省がこの起源から遠い高度な知的諸作用においても働かう
るということを認められなかった。そのせいでロックは、感覚的観念と行為の観念の各々
に対して異なる別の源泉があると推断してしまったと考えられる。これに対し、ビランは、
反省を同じ「意志される努力」の様態を含み持つ一つの移行であると捉える。この移行は、
観念と主体の最初の発生、すなわち、前反省的状态から出発して主体が覚知されるに至る
ような反省の最初の発生段階から出発して、思考ないしは行為のただなかでこの主体が行
為原因として純粋な仕方で覚知されるに至るまで、高まっていく。このプロセスのなかで
反省は、「努力」が現働化する深さの差異に応じて、感性的印象の観念か、あるいは行為
ないしは思考の観念か、といった具合に、二様の結果、二つの観念秩序を生み出すに至る
のである。あるいは、移行としての反省が経る異なる局面に応じて、観念がいかなるもの
として発生するのか、その仕方が差異化するのだと言ってもよいであろう。逆に、高次の
「集中的反省」の局面から見れば、ロックの意に反して、反省は、その程度のより小さな
状況においては、その深みを諸感官における可感的経験のうちにもつと言える。『思考の
分解論』におけるビランの仕事は、反省の実際の行使に拠りながら、五感の各々の様態に
おいて反省の深みの程度を探查することにあつた。彼が自らの仕事を「坑夫(mineur)」
(III:80)のそれに準えるとき²⁰、彼は、観念と主体の発生が思考の研究にとって重要である
という問題意識によって、あるいは、集中化していく反省をそれ自身のうちに深さの程度
差をもち、その差異に応じて種々の観念秩序を生み出す一つの移行と見なすような遠近法
的な発想によって、導かれているように思われるのである。

結びにかえて

本稿で我々は、主に『思考の分解論』に拠りつつ、ビランにおける反省の動性を明らか
にしようとした。ビラン的反省は、意志的行為のなかで思考を行為主体の観点へと移行さ
せるものであり、また、それによって行為とその原理である意志的な力とを直接的な仕方
で覚知させるものであつた。行為が思考に対して行為主体の観点へと移行させるのはなぜ
かと言えば、それは、その行為が生み出す可感的結果が他の要因によって生じた感性的諸
様態から排他的な仕方で自らを区別しつつ知覚するからである。ところで、この行為の排
他的知覚において、行為それ自身の直接的覚知と行為の結果における間接的覚知との間に
覚知の「二重化」が生じる。この「二重化」こそが、意識主体の「集中的反省」の状態を
作り出す。ところが、意志的行為が判明な仕方で現働化しない「感覚の観念」の形成段階

からすでにして、覚知のこの排他的領域が困り込まれつつあり、また主体の内密性への純化のプロセスが始まりつつある。ビラン独自の反省哲学に他ならない知的諸行為の「集中的反省」は、まさしく感覚的観念からのこの移行に始まる。行為の「集中的反省」は、感性的な段階から始まる反省がさらに進展し、純化されたものである。それは、「感覚の観念」に伴う「努力」の様態から決して出ずに、主体が生産する行為のみへと集中していく。それは自己自身への純粋な「折り返し」であり、これによって行為の原理であるところの「自我」が自らの行為に対して何らの表象をも介在させずに直接的に現存するようになる。ところが、この「折り返し」ないしは「退却」は、他ならぬ行為の知覚における「努力」の覚知様態の「二重化」を条件とし、そのうちでのみ生起する。「二重化」と「集中化」とを二つの側面にもつこうした反省の発生プロセスによってのみ、思考および主体の本質的諸形式が把握されうるのであり、この把握を目的とする「主観的観念学」が可能となるのである。

しかしながら、我々はまだメーヌ・ド・ビランの反省のすべてを汲み尽くしたわけではない。本稿において、我々は二重化／集中化という二つの側面の係わり合いによって進展していく反省の動性をいささか図式的に示しはしたが、反省が実際に現働化するその具体的な諸状況について検証を施したわけではない。反省のうちに感官に対して始まりつつある低次の局面が認められうるのであれば、諸感官の区別に即してその現働化の諸相をつぶさに検討していく必要があるだろう。つまり「坑夫」の仕事が実際に遂行されねばならない。

感官に対する反省の開始状況には、少なくとも二つの場合が挙げられよう。一つは触覚のような能動的感官において反省が生じる場合であり、もう一つは声と聴覚の対において「集中的反省」が完足的となる場合である。この区別についてビランは次のように述べている。

反省の最初の行為によって、努力の主体はそれとして覚知され、抵抗する他なる項から区別ないしは分離される。反省の同じ行為、しかしさらに内密な行為によって、音を分節する動的存在者は発声の努力をその諸結果である印象から区別する。この区別がなければ、意志的記号はまったく存しないが、この区別が生じるやいなや、この記号が制定されるのである(VII:375)。

これら二つの場合はともに同じ反省的行為である。が、係わる感官との関連でその現働化の仕方が異なるのである。ここで述べられている意志的記号の制定が可能となるのは、声／聴覚の対において反省が個体化する場合のみである。この制定とは、具体的には、思考の行使のただなかで自らが発する声とその思考の様態の「記号(signe)」として聴取し（行為の諸結果の排他的知覚）、同時に、その聴取の能力を自らのものとして直接的に把握すること（行為の直接的覚知、ないしは行為のその原理に対する折り返し）を意味する。つ

まり、知覚と覚知の生産的・二重化のなかに行為原因それ自身への集中化が生じること、これが言語記号の制定にとって不可欠なのである。他方、二重化と集中化の協働によって制定された言語記号は、思考を成り立たしめている経験の諸形式を抽出し、表現へともたすための欠くべからざる手段となる。「集中的反省」によって把握されるものは、声を発してその声を聴くという発声／聴取の二重化を通して、発声行為の所産である音声を可感的記号とすることによってはじめて表現へともたされるだろう。

それゆえ、集中化と二重化の間には、本稿でとりあげた反省の動性を支える関係と本性を同じくしはするものの、効果の異なる別の記号論的な関係が成立するのだと言えよう。これは本稿冒頭に挙げたビラン的反省の第三の特徴、すなわち表現という特徴に係わるものであり、ビラン固有の記号論が存することを示すものである。行為原因の覚知とその行為の結果の知覚との生産的・二重化は、経験の諸形式を把握させる「集中的反省」を一つの現実的な経験として発生させるが、それら諸形式は発声と聴取の二重化においてはじめて哲学的諸概念として抽出され、言表されるに至る。したがって、声による意志的記号の制定は「集中的反省」、ないしはビランの反省哲学そのものを成立させる覚知の二重化の側面から派生してくるものであるが、それはまた反省哲学の必要不可欠の手段とも見なされる。これら表現に関するビラン的反省の特徴を理解するには、彼がおこなった聴覚やその他の感官の分析をつぶさに見る必要があるが、これについては稿を改めねばなるまい。

凡例

「」は著作からの引用または本文中の語句を、[]は引用者による補足を示し、強調点は引用中ではイタリック体の箇所、地の文では筆者が強調したい箇所に付した。メヌ・ド・ビランのテキストは François Azouvi 編集の *Maine de Biran, Œuvres*, 13 vols., Paris, Vrin, 1984-2001. を使用し、引用箇所には巻数を示すローマ数字の後にコロンを挟んで原著のページ数を記した。なお、本稿での議論に関連するビランの主要著作を以下に記しておく。

II : *Mémoire sur l'influence de l'habitude* (『習慣の影響についての論考』)

III : *Mémoire sur la décomposition de la pensée* (『思考の分解論』)

IV : *De l'aperception immédiate* (『直接的覚知について』)

VII : *Essai sur les fondements de la psychologie* (『心理学の諸基礎についての試論』)

IX : *Nouvelles considerations sur les rapports du physique et du moral de l'homme* (『人間の心身の諸関係に関する新たな考察』)

XI-3 : *Commentaires et marginalia : dix-neuvième siècle* (『注釈と傍注 : 19 世紀』)

注

1 Maine de Biran, *Journal*, vol.2, éd. H. Gouhier, Neuchatel, Éditions de la Baconnière, 1955, p.95.

2 以下、後に続く一文も含めて訳出しておく。「哲学するとは反省することである。すなわち、狂人たちに取り囲まれていようが賢者たちの間であろうが、世界の喧騒のなかであろうが一人部屋の孤独と静寂のなかであろうが、自らの置かれている何らかの立場のなかの、どこでも至るところで、自らの理性を使用することなのである」(Maine de Brian, *Journal*, vol.1, éd. H. Gouhier, Neuchatel, Éditions de la Baconnière, 1954, p.154)。

3 第二習慣論序論冒頭で彼はこう書く。「反省は、身体的にも心的にも、一つの支点、一つの抵抗を必要とする」(II:128)。

4 「自我であるところの力の内密な感知は、知性的分析が結びつくところの最初の鎖の輪、思考主体の認識に適用される反省の支点なので[…以下略…]」(XI-3:216)。

5 「能動的な諸様態、すなわち意志に本質的に依存する諸様態だけが、いわゆる二重化の性格をもつ」(III:108)。

6 Gilbert Romeyer-Dherbey, *Maine de Biran*, Seghers, 1974, p.59.

7 *Ibid.*, p.202.

8 *Ibid.*, p.60.

9 *Ibid.*, p.203.

10 Bruce Bégout, *Maine de Biran, la vie intérieure*, Payot & Rivages, 1995, p.117.

11 ブリュス・ベゲー氏の解釈は、ビランの「集中的反省」の側面を強調するなかにあっても、「覚知の二重化」という、反省のもつ別の、しかし本質的な側面を見落とさない点で、注意に値する(cf. *Ibid.*, pp.117-120)。

12 Cf. III: 60-69, 348-361, IV:31-54, VII:94-97.

13 Ex. LOCKE, *Essai philosophique concernant l'entendement humain*, Trad. Coste, Paris, Vrin, 1983, II, I, § 2.

14 *Ibid.*, p.43.

15 ロックが生得的な主体を暗黙裡に想定しているという批判に関しては、ビランはコンディヤックに賛同する。が、だからといってコンディヤックの解決に満足するわけではない。引用箇所はこう続く。「そして、私が思うに、まさにここにこそ、彼[ロック]の教説を放棄させ、それを原理ないしは起源の一性の教説へと変えてしまうことに最も貢献したものがある」(III:63)。すなわちビランは、高次の反省的諸操作が「感覚の観念」とは別の源泉をもつとした、いうなればロックの観念論的切断のうちに、後のコンディヤックや観念学派に代表される多分に観念論的な感覚一元論的存在論の、すなわちビランにとって第一に拒絶されるべき立場の発端を見ているのである。

16 さらに、「反省」の両義的な定義づけと関連することだが、ロックがそもそも「反省」を受動的な感官のようなものと同一視したことへの批判、「反省」の受動化に対する批判も重要である。この点については以下の論考を参照のこと。Lucien Even, *Maine de Biran Critique de Locke*, Louvain-La-Neuve, Édition de l'Institut Supérieur de Philosophie, pp.16-18.

17 観念の派生に感覚的なものと行為反省的なものとの区別が存するということは、反省を存立させる「意志される努力」の様態のうちにもそれらに対応する区別が存することを示唆している。実際、ビランは『心理学の諸基礎』に至って、明確な仕方でも、努力を非志向的なものと志向的なものに区別するようになる。この二つの努力はどちらも意志されることに変わりはないのだが、行為のその原理に対する折り返しが後者においてのみ純粋で完足的なものとなりうるという点で異なっている。ただし、たとえ志向的な行為であっても、思考する主体の視点が鏡映的な反省の支配下におかれているかぎり、集中的反省が成立することはない。努力の二つの様態については別の機会に論じることにはしたい。

18 もちろん、ビランのロック批判はこれに尽きるものではない。ビランとロックの比較については、すでに挙げた Even 氏の論考の他に以下も参照されたい。Philip P. Hallie, *Maine de Biran Reformer of Empirism 1766-1824*, Cambridge, Harvard University Press, 1959.

19 なお、観念と主体の発生（心的個体化）に関するビランの着想のうちに、シモンドンの個体化論との親近性を見ることも不可能ではないように思われる。たしかに、ビランは主体の自己把握であるところの反省を存立させる「努力」の様態を、質料／形相論的なシェーマに準じて立論しているように見受けられる。ところが、その根本着想にしたがえば、行為の個体化の様態のうちで質料と形相にあたるものがいかにして共に与えられるのかという点にこそ重きが置かれている。この意味で、ビランは既成の質料や形相の暗黙裡の前提から出発するような教説、それによって主体の個体化を説明せんと欲するような教説とは、きっぱりと袂を分かたす。シモンドンの言葉を借りれば、ビラニズムは「質料と形相の定義に論理的に先立つものとして個体化の原理の探求を考える」教説なのであり(G. Simondon, *L'individuation à la lumière des notions de forme et d'information*, Million, p.39)、反省それ自身の個体化から出発して、主体的な経験の諸様態の派生を説明していこうとする教説であるように思われる。なお、ビランとシモンドンを比較する論考には以下のものがある。Pierre Montebello, « Une individuation de la connaissance psycho-physique », *Les neurosciences et la philosophie de l'action*, éd. Jean-Luc Petit, Paris, Vrin, pp.81-97 ; « Simondon et la question du mouvement », *Revue philosophique*, n° 3/2006, pp.279-297.

20 ビランは自らの為す諸能力の分析を、「地下のたくさんの曲がり道をゆっくりと辿っていく坑夫」の仕事に譬えている(III:80)。